明治期の即時的表現の分類と使用状況

――江戸期との比較を通して――

中里理子

はじめに

近代的文章の成立と発達を考える際の観点の一つに、文の接続形式がある。近代の接続表現については、進藤咲子氏、木坂基氏らによる幅広い研究がされているが(注1)、個別の表現形式に注目した調査は少ない。そこで今回、即時的表現を取り上げ、明治期の小説類を中心に調査した。即時的表現とは、現代語の「…やいなや」「…とたんに」などに当たるもので、ある事柄に引き続いて時を置かずに別の事柄が起こることを示す表現である。数ある接続表現の中で即時的表現を取り上げたのは、従来、即時的表現をまとめて取り扱った研究が少ないこと(注2)、古くからさまざまな形式が発達しているので、表現の変遷を辿りながら、語彙の面から近代的文章を見ることができるのではないかと考えたことによる。

本稿の目的は、調査の結果集まった即時的表現を分類し整理すること、それらの表現の使用状況を見ることで近代的文章が定まっていく過程を知る資料とすることの二点である。明治期の即時的表現を見るに際し、江戸期からの流れをどう受け継いでいるかを考えるために、調査の対象を江戸期から明治期までの文芸作品にし、なるべく多くのジャンルに亘るように配慮しながら、江戸は後期を中心に四〇作品、明治は五〇作品を選んで調査した。そのうち、用例のないものや極端に少ないもの等を除き、江戸三〇作品、明治四五作品を資料とし、表に示した(注3)。なお、ここで扱うのは、接続助詞に準ずるものに限った。たとえば、「…とすぐに」は連語で接続助詞的な働きをするものとして扱うが、「すぐに」だけで副詞として独立して用いられるものは扱わない。

一　江戸・明治における即時的表現の分類

集めた資料を基に、即時的表現の中心となる品詞に焦点をあてた分類を試みた。今回明治期の資料に見られなかったものでも、江戸期に用例があるものは分類に加えた。品詞別に分類し

たのは、古く主に「から」「より」などの助詞や「やがて」などの副詞で表された即時的表現が、近世・近代にはすでに複合助詞が発達し、他のさまざまな品詞を使った表現に広がっていることを確認する意味もある。分類を示した後に用例を引きながら各項を説明する。用例は、江戸期の資料にしか見られなかったもの以外は、明治期のものを挙げた。

［品詞別分類］

① 助詞

a 格助詞　から（に）／より（も）

b その他　やいなや／か…ぬかに／や

② 助詞＋副詞

ば・に・と・て＋すぐに／すぐさま／ただちに／たちまち／

たら　にわかに／まもなく／急に／すなはち／さっそく／じきに／やがて

③ 名詞

a 時　折しも／折から／時しも

程こそあれ／折こそあれ／折しもあれ／〈程こそありけれ〉

間もあらせず／ひまもあらせず／程もあらせず

間もなく／ひまもなく

b タイミング　とたん／はずみ／拍子／やさき

c 同時　とともに／と同時に／瞬間

d その他　より先に／そばから／下から／

まま（に）（注4）／［なり］（注5）

④ 動詞

a 未完了　もあへず／もはてず／も終らず／も…ず

b 思ふ・見る　かと思ふと・思へば／かと見ると／

かと思ふ間に／かと見る間に／

と思ふ間もなく

⑤ 形容詞

a 早い・遅い　より早く／が早いか／を遅し／間遅し／

〈や遅き〉

b 同時　とひとしく／（と同じく）（注6）

⑥ 接尾辞

…さま／…次第

＊〈　〉内は、中世の資料（注7）には見られたが、今回調査した江戸・明治期の資料には見られなかったもの、［　］は同じく現代語には見られるものである。

①aは、時間的な動作の起点を示す「から・より」を使うものである。「から（に）」は、古く「吹くからに風の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ（古今和歌集）」のように使われ、明治期にも少数だが「見るから忽ち肉動き肝踊って（風流仏）」のような例がある。「より（も）」は、「…と語るを聞くより鉄弥は忽ち顔色烈火のごとくになり（高橋阿伝夜叉譚）」「狐は斯と見るよりも周章狼狽逃て行くを（こがね丸）」のように使われる。江戸期の資料にも多く見られるが、上接語のほとんどが「見る・聞く・言ふ・語る・思ふ」であり、固定化した表現だったようである。

①bは係助詞（あるいは接続助詞）「や」、並立助詞「か」を

使うものを分類した。「お政が坐舗を出るやいなや、文三は今までの溜め涙を一時にはらはらと落した。（浮雲）」「投げ込む錨の浪に沈むか沈まぬかに、私は『やッ。しまつた。』と絶叫したよ。（海底軍艦）」「マルツラバース已ニ舟ニ上リテ岸ヲ離ル、ヤ忽チ暗夜ニ両親友ニ間ヲ隔テラレ（花柳春話）」などである。「やいなや」は、江戸期には「といなや」「がいなや」の形が見られ、明治期にも「これをきくがいなや（安愚楽鍋）」のような「がいなや」の例がいくつかあり、江戸期・明治期を通して表現が揺れていたようであるが、本来の形は「やいなや」であり(注8)、「いなや」が補足的意味を持つとされる(注9)ことから、助詞「や」を中心とした表現であると考えた。「か…ぬかに」は「其ホ、笑が外へ現はれるか現はれぬに、急にしほ〳〵とした顔付に變じ（小公子）」のように後の「か」が脱落しているものも含める。「やいなや」「か…ぬかに」は、前件の成立を否定的に表現することで、前件が終わらないうちに後件が起こるような、切迫した即時性を表す。

②の「助詞＋副詞」は、「…とすぐに」の周辺にあるさまざまな類義表現である。「源次郎は屋敷に帰ると直に男部屋へ参ると（怪談牡丹燈籠）」「小しゅんは震聲で云つて、直ぐ様腕車に乗ツた（初すがた）」「ダロニーハ斯くと見て直ちに兵隊へ下知を傳へ（自由の凱歌）」「言了ツテ忽チ戸ヲ開キ去ラントシ（花柳春話）」「手水をつかふと間もなく午砲。（二人女房）」「戸開カバ即チ闘ハント敵ヲ俟ツコト半時許ナリ（花柳春話）」「事柄を聞取られて早速長右衛門を呼だしのうへ（冠松眞土夜暴動）」「聞込と直に駈つけて來やしたが（春雨文庫）」など、即時性を示す副詞の意味に頼るものである。助詞の後に読点を入れるものも含めた。

③のaは時を表す名詞を使った表現である。「折しも・折から・時しも」はある時間の幅を表し得るので、「思案に胸を痛むるをりから下でお松が大声にて（春雨文庫）」のような即時的表現と認められないものも多いが、その中で「口を掩ふ折しも再たび時の鐘ボオーン（春雨文庫）」「目ニハ見ヘネド手ノ如キモノニ觸レタリト思フ折柄イト冷ヤカニ柔軟カナル指ノ我ガ咽喉ヲ掴ミタルト覺ヘタリ（龍動鬼談）」「その声に主客ともに驚く時しも、間の障子颯と開き、入り來る二人の女あり（自由艶舌女文章）」など、二つの事柄が時間的に近接して起こり、「やいなや」「とたんに」に置き換えてもよいような例を数えた。「…逃よ〳〵』といふ程こそあれ、四方八方へ散々に乱れ立ち（花暦八笑人）」「膝に引ツ敷く折こそあれ。ふしぎや又もかけくる忠信。（義経千本桜）」「間近まで往よと見えたる時しもあれ噇と打出す小銃一発（春雨文庫）」などは、『平家物語』に見られる『あはや、西の手はやぶれにけるは』といふほどこそありけれ、とる物もとりあへず我さきにとぞ落ち行きける。」のような慣用表現から発展した用法と思われるが、明治期にはほとんど見られない。「丈の高い給事が馬車の戸を開ける間も有らせず、下へ飛び下りました。（小公子）」「背の将軍は咄嗟と叫ぶ間もなく眞つ逆さまに橋上へ跳ね落さるゝ不意の大變（鬼啾啾）」「避ける間もなくだれだかトンと文三に衝き当たツた（浮雲）」などの系統は、「隙もあらせず・時もあらせず・間もあらばこそ・隙もあらばこそ」等、同様の表現がいくつも見られる。

前件が完了する時間を否定し、重ねて後件が起こることを示す。

③bは、「嘘らしいけれどもあの娘が入ツて來る途端にはツと思つたよ（罪と罰）」「パット影が消へた機会にバタ〳〵〳〵と誰だか跣先で駈出した。（薄命のすゞ子）」「ひつぱるはづみに一度にしりもちうしろの方へひつくりかへり（西洋道中膝栗毛）」「そこへ臥倒れる拍子に、手ばしこく、枕を取って頭にあてがい（浮雲）」「山田はいつもの酒癖とて、相手欲しやと思ふ矢先、我を忘れて大音声（汗血千里駒）」など、タイミングやきっかけを示す名詞を使って、前件成立とほぼ同じタイミングで後件が起こること、前件がきっかけで後件が起こることを表す。例に引いたように、「とたんに」に上接する語は動詞の終止形と過去の助動詞「た」の両形があり、揺れが見られる。

③cは、「件の記事を讀終ると共に、伝吉が或は其加害者にはあらずやとの疑念、忽然其胸中に畫かれたり（變目伝）」「母の方へ走り寄る子供を見ると同時に、此老紳士の心の中に起つた得も云はれぬ感情を（小公子）」「洋杖やツと一聲下すと同時、ふら〳〵と目は眩む（白玉蘭）」など、前件と後件がほとんど同時に起きるかのような、非常に近接した時間関係を表すものである。「…仕事が大打撃を被りかけたと共に、僕の弟までも失ふところであつた。（放浪）」「面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。（キタ・セクスアリス）」のような、二つの事柄の並立を表すものは含めない。また、この二例の同時性とはやや異なるが、「報酬的に何か言ひ付けた方が好からうと、問はれた瞬間に思ひ付いた（青年）」のような同時性に近い近接した時間を表す名詞もここに入れた。

③dは、「お夏様か。ここにかと。言ふより先に抱合ひ（五十年忌歌念仏）」「…と咄す側から貪次郎其處で小生の監るには（中略）この貸方が大丈夫かと思ハれると…（寄笑新聞）」「…と思ふ下から直ぐに自分で、自分が異見をされるもの（風流線）」「『合点だい！』それといふまま挽出せり（義血侠血）」などであるが、用例数は少ない。

④aは、「敢ふ・果つ・終る」という動作の完了を表す動詞を中心に、「…も…ず」という形式をとる慣用的表現である。「草鞋の紐を結びもあへず急ぎ外へ立出れバ（緑蓑談）」「証拠ありやと言はせも果てず懐中より拾ひし艶書の切断取出し（高橋阿伝夜叉譚）」「返答なすを聞きも了らず、男は首を左右に打ち振り（自由の凱歌）」「トいふをも待ず清吉が説出したるむかし語り（高橋阿伝夜叉譚）」「ドウと斃る、を起こしも立てず畳みかけ、（汗血千里駒）」など、前件の完了を否定して前件が未完了のまま後件が起こるかのように表す表現である。bは、「兩手をそこへ當てたかと思ふと、直ぐその露は見えなくなった。（放浪）」「今仆れたかと思ふ間にすや〳〵と寝入る（二人女房）」「一鞭馬腹に加へしと見る間に、雙輪砂塵を捲き、遠く彼方へ走せ去りぬ。（鬼啾啾）」「とろとろとまどろむと思ふ間もなく塒をいづる山がらすに呼覚され眼を開きて（高橋阿伝夜叉譚）」など、前件が成立した事を確認する時間を置かずに後件が起こる事を表すもので、「思う・見る」という判断を表す動詞を使って表現する形式である。

⑤は形容詞を使うもので、aは「皆々聚やといふより早く。合圖の小笛を吹き鳴らし。（西の洋血潮の暴風）」「刀柄に手が

掛るが速いか、スラリと引き抜き（怪談牡丹燈籠）」「大急ぎで湯に入り戻るを遅しと明日の支度に御膳籠へまた石瓦をつめ（寄笑新聞）」「手を懐中に差入しと見る間遅しと取出せし（鬼啾啾）」など、前件・後件の成立に関する心理的な先後関係を問題にし、切迫感を表すものである。bの「とひとしく」は「お勢もまた昇が『御結構があッた』と聞くと等しくびつくりした顔色をして（浮雲）」のように、「とともに・と同時に」と同様、同時性を表すものである。

⑥の接尾辞は、「清吉ハ起上りざま抜打ちに破乱離寸と肩先かけ（高橋阿伝夜叉譚）」「用が済み次第直にまたお迎ひに遣しませう（怪談牡丹燈籠）」の二つである。「さま」は瞬間の様態を表し、「次第」は近接した時間の順を表すものである。

以上のようにさまざまな表現があることを念頭に置き、江戸期から明治期にかけての即時的表現をまとめ、使用状況を概観する表を次ページに示した。表の項目は、紙面の都合もあり、一部を省略してある。

二―一　明治期の即時的表現

表をもとに、明治期の即時的表現の様相を、江戸期の使用状況と比較・対照させながら考えていきたい。

明治期前半を中心とする非言文一致文と、後半を中心とする言文一致文とで、使われる即時的表現の違いを見ると、前者は「より（も）」「より早く」「（を）遅しと」「もあへず・はてず・終らず」「折しも・時しも」類、「とひとしく」が使われているのが目につくが、後者はそれらの使用が減少し、「（か）と思へば・思ふと」類、「とともに・と同時に」「がはやいか」の使用が増加している。「やいなや」「とたんに」は、明治期全体を通して使用率が高い。以下、表現ごとに江戸期と対照させながら見ていく。

「より（も）」は江戸期にも様々なジャンルで使用されていた(注10)が、上接語が「見る・聞く・言ふ」の類にほぼ限定された固定化した表現であった。明治期前半では、漢文訓読調を基調とする『花柳春話』以外の多くの作品に見られるので、和文的要素として文章語では広く使われていたようである。初期の言文一致文でも『浮雲』『露子姫』に見られ、後半でも『破戒』に「見るより」と使われた例があり、言文一致文が浸透する以前では定着度の高い表現であったようである。「より早く」は「より」から派生したと思われるが、上接語の幅が広く、江戸期には「逢ふ・行く」など、明治期には「取る・抜く」など様々な語が上接しており、「より」の使用範囲を補う語であったのではないかと考えられる。「より早く」は明治期の非言文一致文にも多く見られる。二十年代以降には言文一致作品の中でも非言文一致の作品を書いている作家たちのものに使われているが、言文一致の新しい文章にはあまり見られず、「より」の衰退とともに他の表現に押されたようである。

「（を）遅しと」は、今回の江戸期の調査では『雨月物語』に一例、「閨房の戸あくるを遅しと、かの蛇頭をさし出して」が見られただけである。中世の『十訓抄』に「家に着くやおそき、

作品 ＼ 即時的表現	龍動鬼談	冠松夜暴動	高橋阿夜叉譚	伝真	花柳春話	春雨文庫	寄笑新聞	西洋道中膝栗毛	安愚楽鍋	三人吉三郭初買	小袖曾我色縫	春色辰巳園	春色梅児誉美	花暦八笑人	浮世床	浮世風呂	椿説弓張月（＊1）	東海道中膝栗毛	錦之裏	傾城買四十八手	心学早染草	大悲千禄本	卯地臭意	見徳一炊の夢	遊子方言	雨月物語	義経千本桜	芦屋道満大内鑑	浮世親仁形気	世間娘容気	五十年忌歌念仏	武道伝来記	日本永代蔵	世継曾我	浮世物語	是楽物語	竹斎	恨の介	
	八八八〇〇九	八八七〇〇九			八八七八六～八二			八八七〇五～八四	八八七一	八八六〇	八八五九	八八三三	八八二〇～四九		八八一一九	八八一〇九	八八〇七～	八八〇〇二～〇九	七七九一	七七九〇〇	七七九八	七七八五三	七七八一		七七六〇	七七六八七	七七五四三	七七二一〇	七七一〇七	七七一〇〇	六六八七	六六八八	六六八？？	六六五八	六六二四	六〇九		
より		1	1	2	8		4	1	2	1	1	2	6	2				4	1		1	1				4	13	15	2	3		3		6		1		9	
やいなや		2				4	1	1	2	3								2					1							1		1	1							
…か…ぬかに																																							
や					1																																		
助＋すぐに						6	2	2	4	7	3		3		2	2		1														1	1	1					
助＋ただちに						1		1																															
助＋たちまち			4	5	4		2	2	1			3	1	1	1		17				1					2							1		1				
助＋まもなく									1																								1						
折しも・折柄時しも	5	1	1	1		5	2				1	1	2	7			4	5		2							3	4			1				1	1	1	1	
程・時・折こそあれ													2	1				3									2	1						1						
間・隙・程もあらせず	1		1			2		1																											1				
間・隙・程もなく			4					1		1																1	1	1											
とたんに			2				1	2	2					3																									
はずみ						1		3		2			1	3				5				1																	
拍子								9			2	1		4			2		13	1	1			1	2					1									
とともに																																							
と同時に																																							
もあへず			3			1												23									7	3	1		1	1		3	4				1	
もはてず			6															7									3	1		1	2	1		4			1			
も終らず	1																	2								1								1						
も…ず			3															1									1													
かと思へば と思ふと						3		2		1						1	1											1		1										
思ふ間もなく			1																																				
かと見れば																		1								1													
と見る間に																																							
より早く			1					2					1														5	1			1	1		1	1	1				
が早いか						1										1	2																							
を・間遅しと			1				1																			1														
とひとしく			3					1										1			2							2		1		1								
さま			1					1					4				1																		1					

作品 ＼ 即時的表現	西の洋の暴風	血潮の	自由の凱歌	汗血千駒	自由女神	艶里文	怪談牡丹燈籠	鬼啖談	緑蓑談	雪中梅	浮雲	五月鯉	薄命のすず子	露子姫＊	風流仏＊	初恋（＊2）	白玉を懐いて罪あり	二人女房	こがね丸＊	小公子	罪と罰	変目伝＊	義血侠血＊	大さかづき	青葡萄	海底軍艦	初航海	十五少年＊	今戸心中	破戒	坊ちゃん	風流線	初すがた	蒲団	新世帯	ふらんす物語	放浪	青年
	八二	八二	八三	八三	八四	八四	八四	八五	八六	八六	八七	八七	八八～九	八九	八九	八九	八九	八九	八一	八一	八二	八三	八四	八五	八五	八九	八八	八八	八六	九六	九六	九〇	九〇	九七	九八	九九	九九	一〇～一一
より	1	9		14		1	5	6	13			4		4						6		10	4		3					1		3		1				
やいなや	3		3		7		1	3				3	1				9	2				1	0		1	1	5	9		1	6	5	1	2	2		1	3
…か…ぬかに													1										2														1	
や				13														2									2					3		2			8	
助＋すぐに			1	4	4	1		4	1				3	2			3	3	3			3	5		6	2	1		2	1	8	1	0	2	1	3	3	9	4
助＋ただちに		1							3	5				2							2	1	2				3						1		1		3		
助＋たちまち	4		2	1	1	2		1	7	4		1	2	7	1		2	2			7	1	1		2	5											4	
助＋まもなく													1					1				1			1												1	1
折しも・折柄時しも	8	2		5	6			1	1					2	1							1																
程・時・折こそあれ					2																																	
間・隙・程もあらせず		1	2		3																	1										1	1					
間・隙・程もなく	5	1			1			3				3					1	1				1			1		1								2	1		
とたんに		2					2						1	2	2			1	4	3		7									4	4	1	3				1	1
はずみ		1			1	1			3	1											1																		
拍子												1						1		1																	1	1
とともに																							3	2					9			2	1	1			1	5	3
と同時に													3		1			5			3	2					4	1			8	1	3	1			4	8	8
もあへず	3			2					1											5												1							
もはてず				1																1												1							
も終らず	2			1					2																														
も…ず				1					1																							1							
かと思へばと思ふと				2			1					1		3			1		1			1	3	3				1			3	4	6	2	1			2	1	3
思ふ間もなく									3					1					1													1	1						
かと見れば													1																			1					1		
と見る間に				2					1																1									3					
より早く	1	2		1	2				1	1			2		2			1	1			1	1			2								2	2				1
が早いか					2												1																					1	2
を・間遅しと									1	1			1																										
とひとしく	2			8					2			3						2	1			2										5							
さま	1			3	5													1				1	1										2						

＊1 前編・後編を調査した。

＊2 嵯峨の屋おむろの作品。

作品名の下の＊は、【浮雲】以降のもので非言文一致の作品である。

義光を『聞こゆべきことあり』とて呼び寄せければ」という「や遅き」の例がいくつか見られたが、これにつながる表現であろう。江戸以前の古い形式を受け継ぐ表現であると言える。

「もあへず・はてず・終らず」は、江戸前期及び馬琴の作品に特徴的に見られる。明治期は西鶴・近松・馬琴に影響を受けたらしい前期の作品や、紅葉や鏡花の作品に使われている。これらの表現も上接語のほとんどが「見る・聞く・言ふ・語る・思ふ」の類となっており、「より」同様固定化した表現であった。「仰せもあへず」「言ひも終はらず」など五七調の音調に乗せやすい表現であり、旧来の伝統的なリズムを作り出す表現でもあったようだ。

「折しも・時しも」類は、明治期の非言文一致文では漢文訓読調の色彩の強い『花柳春話』『十五少年』などの作品以外で多く使われているが、江戸期でも「より」同様使用例が多く、和文脈の慣用的表現であったと思われる。

「とひとしく」は、江戸期の七例中五例が「聞く」に接続しており、「より」「もあへず」類と同様固定化しているかと思われる面もあるが、残り二例が「出生する・寝入る」という別系統の語に接続している。明治期の用例でも「ひらく・癒る・入る」等となっており、様々な語に接続する応用範囲の広い表現であったようである。ただ言文一致文では使用例が少なく、近代的文章では定着しなかった表現である。言文一致文でこれに替わって使われるようになるのは「とともに・と同時に」という名詞を使った表現であり、これらが現代の使用にもつながっていく。また、表には載せなかったが、「瞬間」が明治後期の『海底軍艦』『風流線』『青年』に一例ずつ見られた。これも近代になって使用が拡大する新しい即時的表現であろう。

右の他に、明治期後半を中心とする言文一致文では、「(か)と思へば・思ふと・見れば」類の使用が目につく。これらは江戸期にも何例か見られるが、明治期になって使用が増加しており、近代的文章の即時的表現として使用されていく様子がうかがえる。「がはやいか」は、江戸期には『浮世風呂』『浮世床』の会話部分に、明治期の前半には『春雨文庫』の会話部分や『牡丹燈籠』にあり、かなり口語的な表現であったようだ。明治期後半には地の文にも使われており、言文一致文になって文章にも使用され、使用の幅を広げていくであろう片鱗が見られる。

「やいなや」は、「といなや・がいなや」を含めて江戸期からいくつか用例があり、明治期には非言文一致文でも言文一致文でも、和文調でも漢文訓読調でも、様々な文体で広く使われている。翻訳語的表現と言われることもあるが(注11)、翻訳文の即時的表現に「やいなや」が用いられたのは、「より」「もあへず」類のように固定化した表現でもなく、「折しも・時しも」類のように和文的要素の濃い表現でもなく、「とひとしく」のような同時性とも違った即時性を表す表現であったためであろう。翻訳に「やいなや」が専ら使われていても、「やいなや」自体が翻訳的表現というわけではない。なお、即時性を表す助詞の「や」は、「やいなや」の「いなや」が脱落した形ではないかと思われるが、明治期以降に用例が見られる。

「とたんに」は江戸期には終りごろに使用例があったが(注12)、きっかけを表す「拍子・はずみ」の方が多く使われている。明

治期になると、「とたんに」の用例数が増し、それにつれて「拍子・はずみ」は減少する。「とたんに」は言文一致文になって多く見られ、その点では、「やいなや」が文章語としての要素が強いのに対し、平易な口語的表現であったのではないかと思われる。

助詞に副詞が接続する形式では、副詞の部分だけを見ると、「すぐに・たちまち」が江戸期以来多用されているが、「ただちに・まもなく」は明治期以降多くなっている。「まもなく」は、「…間もなく」の表現から独立して用いられるようになったものであろう。これらの表現に関しては、即時的表現としてではなく助詞(「に・ば・と・て」等)と副詞の使用の問題になるので、ここでは触れない。

以上、明治期の即時的表現を具体的に見てきた。漢文訓読調の文章に和語の慣用表現が使われないという、文体と用語の問題は多少あるが、戯作、翻訳、政治小説、少年文学などのジャンルに関わりなく、明治前半を中心とする非言文一致文と、後半を中心とする言文一致文とで、使われる即時的表現に明確な違いがあった。前者は江戸期あるいはそれ以前の流れをそのまま受け継ぐ表現を多用しており、後者は口語的な表現や新しい形式を発展させていく様相が見られた。また、現在の即時的表現の主流である「やいなや」「とたんに」は、文体を問わず、すでに明治期に広く用いられていたことも見て取れた。

二―二　江戸から明治にかけての即時的表現

江戸期の調査資料が少ないが、江戸から明治にかけての即時的表現の変遷という点から大きな流れを見ると、次のようになる。

品詞の面では、「より(も)」などの助詞(「より」を補う「より早く」も含む)や、「もあへず・はてず・終らず」のような動詞を使った表現および「折しも・時しも」「折しもあれ」など時を表す名詞を使った表現から、「やいなや」「(か)と思ふと」などの複合助詞や、「とたん・拍子・はずみ」「同時」など前件と後件の関係性を表す名詞を使った表現へと大きく移り変わっている。音調の点では、「(言は)せも果てず」「(膝に引っ敷く)折こそあれ」「(待つ)間もあらせず」など、旧来のリズムに乗せやすい表現から、「(言ふ)やいなや」「(来る)とたんに」「(見る)と同時に」など、短い簡潔な表現に替わっていき、「折しも・折から」「ひとしく」などの和語を使わなくなる一方で、「同時」「瞬間」など漢語を多く使うようになる傾向もある。「より」「…もあへず」類、「折しも」類など、固定化した表現、慣用化した表現は言文一致の新しい文章では消えていき、「思う・見る」を使った前件成立の確認を問題にするような表現は増えていく。成立の早さを問題にする表現では、「遅し」が消え、「早い」を使った表現が優勢になる。

おわりに

調査した資料をもとに、明治期を中心に即時的表現を分類し、

それらの使用状況について、江戸期の表現と対照させながら概観した。即時的表現は他の接続表現と同様多くの表現形式があり、時代や文体による違いが見られる表現である。今回は、江戸から明治にかけてという一時期しか見ることができなかったが、更に時代をさかのぼり、表現の変遷を見ていくことも必要であろう。即時的表現に関して、明治期の文体革新に伴い、言文一致文と非言文一致文での使用の違いが明確に現れていたように、他の接続表現についても同様の調査と検討が可能であると思われる。このような具体的な調査と資料の積み重ねから、近代的文章の成立過程を考えていく研究を目指し、今回の調査資料に偏りがあること、分析が緻密でないことを反省しつつ、一資料の提供としたい。

注

1　進藤咲子氏の「接続助詞の諸相―明治期の新聞を資料として―」（『品詞別日本文法講座・助詞』所収「接続助詞」第二章　明治書院一九七三）、木坂基氏の諸研究（『近代文章成立の諸相』和泉書院一九八八「第五章　近代日本語表現の諸相　第一節　近代小説の接続語」など）がある。

2　即時的表現をいくつかまとめて扱った研究には、近世を中心とする長谷川政次氏の「即時的表現「やいなや」とその類語―室町後期・江戸前期の資料を通じて―」（「野洲國文學」50号　一九九二）、順接助詞「と」の成立に関連して「と等しく／とそのまま／と否や」等に触れた、岡崎正繼氏「順態接続助詞『と』の成立について」（「国学院雑誌」一九八〇・三）、小林賢治氏「順接条件の接続助詞『ト』の成立と発達―狂言台本を中心に―」（「上越教育大学国語研究」1号　一九八七）、現代語の類義表現を扱った森山卓郎氏の「～するやいなや／～するがはやいか」（「日本語学」3巻10号　一九八四）、森田良行・松木紀子氏『日本語表現文型』（「時間的関係1同時性を示す」の「や否や／が早いか／そばから／とたん（に）」「（か）と思うと／（か）と（思う）間もなく／（か）とみると／（か）とみれば」の項（アルク　一九八九）、森田良行氏『基礎日本語辞典』「とたんに」の項（角川書店一九八九）、拙稿「時間的近接関係を示す接続表現について―『やいなや』『とたんに』を中心に―」（「埼玉短期大学研究紀要」7号　一九九八）があるが、いずれも即時的表現全体を見渡したものではない。

3　資料は以下の本に拠った。

〈江戸〉『日本古典文學大系』（岩波書店）48西鶴集下　54歌舞伎脚本集下　56上田秋成集　59黄表紙　洒落本集　60椿説弓張月　62東海道中膝栗毛　63浮世風呂　64春色梅児譽美　90假名草子集　『新編日本古典文学大系』（岩波書店）74仮名草子集　77武道伝来記　他　78けいせい色三味線　けいせい伝受紙子　世間娘気質　91近松浄瑠璃集上　93武田出雲並木宗輔浄瑠璃集　『日本古典文学全集』（小学館）37仮名草子集　47洒落本　滑稽本　人情本　74近松門左衛門集2岩波文庫『花暦八笑人』『三人吉三廓初買』

〈明治〉『明治文学全集』（筑摩書房）1明治開化期文學集（一）　2明治開化期文學集（二）　5明治政治小説集（一）　6明

治政治小説集（二）　7明治飜訳文學集　10三遊亭圓朝集　17二葉亭四迷　嵯峨の屋おむろ集　19廣津柳浪集　20川上眉山　巖谷小波集　21泉鏡花集　23山田美妙　石橋忍月　高橋文淵集　25幸田露伴集　32女學雑誌　文學界集　55夏目漱石集　65小杉天外　小栗風葉　後藤宙外集　67田山花袋集　68徳田秋聲集　71岩野泡鳴集　73永井荷風集　95明治少年文學集『紅葉全集』（岩波書店）『鷗外全集』（岩波書店）『新装版藤村全集』（筑摩書房）

4　「まま」は『古語大辞典』（中田祝夫編・監修　小学館）の名詞の項にこの用法が解説されている。また小林賢次氏の前掲論文によれば、「とそのまま」の形もあるそうである。

5　「なり」に関しては、「赤シャツは駈け込んだなり、何かきよろ〳〵して居たが（坊ちゃん）」のような、即時性を表す「なり」に近いものが一例見られたが、そのままの状態を表す意味と峻別しがたく、分類例からはずした。

6　岡崎正繼氏の前掲論文に拠れば、『醒酔笑』に即時的表現となる「と同じく」の例があるそうである。

7　中世の資料は、平家物語・徒然草・十訓抄・増鏡・義経記・御伽草子の六作品である。平家物語は『日本古典文学全集』（小学館）、十訓抄は『新編日本古典文学全集』（小学館）、他の四作品は『日本古典文學大系』（岩波書店）によった。

8　長谷川政次氏は、「と否や」の形式について「『と等しく』と『や否や』の混淆によって生じた」と述べている。（「野洲國文学」50号　一九九二）

9　『時代別国語大辞典　室町時代編一』の「いなや」の項に「初めの『や』が主として接続の意を担当して、『いなや』は念を押す程度に止まったであろう」と解説されている。

10　ただし式亭三馬の二作品と滝沢馬琴の作品に一例もなかったのは特徴的である。

11　小池清治氏は、漱石の文章に「翻訳体と判断される表現が続々と取り入れられている」として『吾輩は猫である』の猫が「翻訳調の日本語」を話す例の一つに「や否や」の文を挙げ、「いかにも英語調」の表現と解説する。（『日本語はいかにつくられたか？』ちくま学芸文庫　一九九五 PP.184―185）

12　副詞的に使われる例は、『浮世風呂』に「湯屋の大戸を内よりひらく。とたんによろ〳〵として、大戸へこけかゝりしが」、『三人吉三廓初買』に「蔭へ逃げてはひる。と、この途端に十三郎上の方より逃げて出て」等の例があった。『日本国語大辞典』に「とたんのわれ」（浄瑠璃・箱根山合戦）、「みるがうちに、とたんやいころり」（浮世草子・人倫糸屑）の用例があり、名詞・副詞としては以前から使われていたようであるが、接続助詞的な用法は、江戸後期に一般化したのではないかと推測される。

（記）

本稿は、平成十年度全国大学国語国文学会春季大会において「即時表現の変遷について―江戸から明治中期まで―」という題で発表した内容をもとに、追調査を加えて書き改めたものである。

（本学教官）